NO. 2018・61 号
発行日：2018 年 10 月 17 日

検査のパレット

今回は、RAS（ラス）・BRAF（ビーラフ）遺伝子変異解析検査（以下、RAS・BRAF遺伝子検査）についてお話しします。

RAS･BRAF遺伝子検査は､大腸がんの化学療法を行う前にRAS及びBRAF遺伝子変異を確認し､その遺伝子変異の有無に応じて治療法を個別化する病理コンパニオン診断（検査のパレットNo.2013・33 号参照）です。従来は、セツキシマブなどの抗EGFR抗体薬の投与を対象としてRAS遺伝子を検索していました。（検査のパレットNO. 2015・49 号参照）

今回新たに追加で検索するBRAF遺伝子とは細胞内における情報伝達や細胞増殖に関わるたんぱくの一つで、BRAF遺伝子変異が陽性である大腸がんは予後が不良であるものの、近年の研究により、多剤併用化学療法（FOLFOXIRI+ベバシズマブ（Bmab）療法）の有効性が示されています。

検査結果の解釈ですが、RAS及びBRAF変異陰性の場合、抗EGFR抗体薬の治療効果が期待できます。RAS変異陽性（大腸がんの45-50%）やBRAF変異陽性（大腸がんの5-10%）であれば抗EGFR抗体薬の治療効果は期待し難いと解釈されます。（図1）

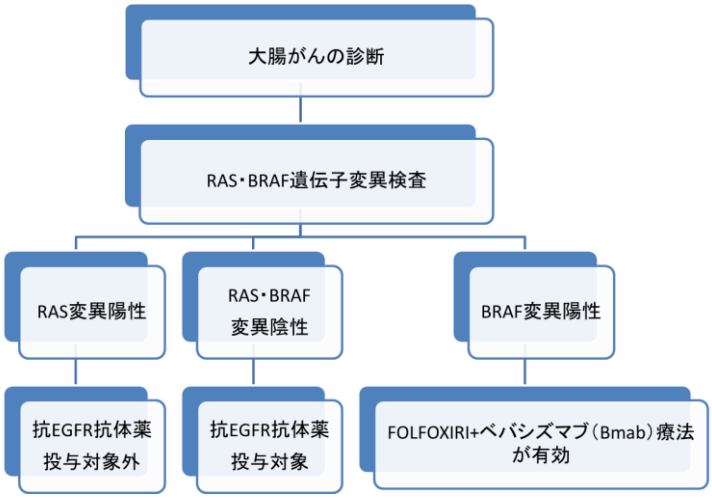

図1. RAS・BRAF遺伝子検査の流れ

RAS・BRAF 遺伝子検査はリンチ症候群の診断の補助としても行われます。リンチ症候群とは遺伝性大腸がん（全大腸がんの約 2-4%）の一つで大腸がんや子宮内膜がんをはじめ様々な悪性腫瘍の発症リスクも高まる疾患です。

今後とも検査室をどうぞよろしくお願いします。

文責：永田　拓生　　監修：石竹　久仁